

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H25. 12. 13)

1. 切断量の推移

(成品切板出荷+賃加工)

(単位:千ト)

項目	24年度		25年度			
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	54 (3)	60 (3)	61 (2)	63 (2)	60 (2)	60 (3)
規格	378 (70)	345 (69)	371 (60)	385 (58)	440 (63)	460 (67)
合計	432 (73)	405 (72)	432 (62)	448 (60)	500 (65)	520 (70)

(出所)・実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

・カッコ内の数値は賃加工量で内数。

【コメント】

■ 25年度2Qの切断量(実績)は、前期比3.7%増、前年比0.7%減の448千トとなった。

4期連続で前年比二桁減が続いた切断量は、24年度4Qを底に着実に回復している。

■ 3Q(想定)は、500千ト程度(前期比+11.6%、前年比+15.7%)と想定。

・10月164千ト(前月比+8.4%) + 11月(速報)160千ト(同▲2.4%) + 12月(想定)175千ト(同+9.4%) ≒500千ト。23年度4Q(522千ト)以来の50万トン台乗せ。

・21年度3Q:468千ト、前期比+15.3%、22年度3Q:542千ト、同+2.1%、23年度3Q:512千ト、同▲3.0%
24年度3Q:432千ト、同▲4.0%

■ 4Q(想定)は、520千ト程度(前期比+4.0%、前年比+28.4%)と想定。

・建設、建産機関連需要とも前期比増加(+5%程度)、その他部門は横ばいと想定。

・21年度4Q:468千ト、前期比+15.3%、22年度4Q:515千ト、同▲5.0%、
23年度4Q:522千ト、同+1.9%、24年度4Q:405千ト、同▲6.2%

■ 25年度切断量計推定):1,900千ト。前年度(1,784千ト)比+6.5%。

(参考) 切断量の前年同期比の推移

20年度1Q:+6.3%、 2Q:+6.6%、 3Q:▲3.3%、 4Q:▲24.8%

21年度1Q:▲34.1%、 2Q:▲37.9%、 3Q:▲25.0%、 4Q:▲4.0%

22年度1Q:+13.5%、 2Q:+26.3%、 3Q:+15.8%、 4Q:+10.1%

23年度1Q:▲1.1%、 2Q:▲0.5%、 3Q:▲5.6%、 4Q:+1.4%

24年度1Q:+1.7%、 2Q:▲14.7%、 3Q:▲15.6%、 4Q:▲22.4%

25年度1Q:▲12.9%、 2Q:▲0.7%、 3Q(推):+15.7%、 4Q(推):+28.4%

2. 業況

厚板シャー業界を取り巻く状況を概観すると、足元の需要環境は、前回報告時点（9月）に比べると、切板需要の約8割を占める建設および建産機関連需要に牽引されて、全国的に回復基調が鮮明になってきた。

すなわち、建産機部門は、急増する内需に支えられて堅調を継続している。長期低迷が続く鉱山機械を除き、主要機種は排ガス規制や消費税導入前の駆け込み需要等の特殊要因が寄与して、好調な分野・機種が徐々に拡大している。しかし生産拠点の海外シフト問題や駆け込み需要一巡後の反動減など懸念材料も多く、先行きへの不透明感が依然残されたままである。

一方、建設関連分野は、鉄骨建築は、物流倉庫・店舗の建設に加え、北海道・首都圏・名古屋地区を中心とした大型建築案件の着工が本格化しており、各地区のファブは向こう半年以上の受注残を確保し高操業を続けている。一方、橋梁は昨年度以上の入札量が見込まれるが、年度上半期のシャーの加工量は低位にとどまり、足踏み状態が続いている。

今後の見通しについては、①建産機部門は、受注面で機種間の濃淡は多少残るものの、駆け込み需要や震災復興需要の本格化、円安を追い風にした輸出増、堅調な設備投資動向等を勘案すると、全体としては当面堅調に推移するとみられること、②建築・橋梁分野についても、大型再開発案件の着工が本格化していること、橋梁は、大型補正予算等の執行継続が見込まれることから、年度末に向けて徐々に回復するとみられる。

これに伴い、シャー加工量も、3Qは6期ぶりに前年同期比プラスとなり、4Qはさらにそれを上回るレベルまで回復すると予想される。

こうした需要拡大局面下で、母材の値上がり・入手難・納期の長期化、在庫の歯抜け等材料面の不安に加え、人手不足、ファブの能力不足による工事遅延、原燃料や輸送コストの上昇など、新たな経営圧迫要因が表面化してきている。

シャー各社は、加工賃の是正、材料値上げ分の転嫁とともに、採算性確保に向け、非常に厳しい舵取りを迫られている。

ちなみに、当組合が実施している月次統計「鋼板流通調査」で、「切板需給」の推移をみると、24年度2Q以降出荷減が止まらず、出荷見合いの受け入れ減で、需給は25年度1Qまで縮小の一途を辿ってきた。この間在庫率も200%超えの高水準が続いた。しかし、2Qに入り出荷は5期ぶりに前年比プラスに転じ、在庫率も9月末196.5%、10月末192.4%と低下傾向を示し、ようやく需給改善の兆しが数字に表れてきた。

なお、11月（速報）需給は、仕入れ量188千ト（前年比+16.8%）、出荷量183千ト（同+10.2%）と入出荷とも5カ月連続の前年比増加となった。この結果、在庫量は361千トと若干増加したが、在庫率は197.4%と適正レベルを維持している。

今後は、需要（出荷）の増勢が続くとみられることから、切板需給は一段と引き締まって推移するとみられるが、これに母材の入手難等を加味すると、相当逼迫した状況に向かう可能性も想定される。

また、全国のシャーパー各社からの情勢報告を整理すると概要以下の通り。(12/6 市場委員会)
【北海道】鉄骨は、1～11月計(北海道機械工業会鉄骨部会の積算数量ベース)では前年比+11.5%と堅調を継続している。昨年からの継続大型3物件(札幌三井JPビル、北海道新幹線函館車両基地、札幌競馬場)のほか、再開発計画が相次ぎ着工しており、ファブは来春先までのフル操業が見込まれている。一部ファブに選別受注の動きが出始めているが、鉄骨単価はまだ適正レベルまで改善されていない。

一方橋梁は、25年度は大幅増が予想されたが、入札や積算業務の人手不足等により発注が大幅に遅れ、期待外れに終わりそうである。

シャーパー各社は、鉄骨系ファブの高稼働に支えられ、高い操業が維持されている。

【東北】岩手県・宮城県ともに沿岸部の復興事業は、依然活発である。

土木工事に加え、水門・防潮堤発注も本格化している。また大型橋梁の発注も復興支援助道の整備や三陸道の拡幅工事などが具体化している。

建築は、災害復興住宅、老人ホーム、病院建設が始まっているほか、倉庫、大型店舗、地下鉄開業に向けた再開発、仙台駅周辺開発、仙台港背後地開発など、宮城県を中心に需要が高まっている。

ファブの加工量は、年度内から来年夏場まで確保しており、仕事を選別する状況になりつつある。シャーパー各社の稼働率も高く、設備投資を検討している企業も増えている。今後繁忙とタイト感はさらに加速するとみられる。

【関東】鉄骨は足元徐々に回復しており、シャーパー加工量も増加基調にある。しかし橋梁はレベル的には未だ低位にある。

今後の鉄骨・橋梁分野のファブ稼働は、フル生産の時期を迎え、年末以降高位の状態を継続する見通し。鉄骨受注は、ファブの製作能力を上回る状況にあり、先行き工事遅れの懸念が強まっている。シャーパー稼働も12月以降、フル操業が続くものとみられる。

一方、建産機関連の受注は足元増勢が続き、回復基調が鮮明になりつつある。しかし鉦山機械の長期低迷、一部機種の新規増税や排ガス規制施行後の反動減、海外シフトの動きが止まっていないことなど、先行きへの不安材料は多い。

【新潟】4～10月計の鉄骨量は、前年同期比34%増と堅調に推移している。ファブ各社(H、Mグレード)はフル稼働状態で、来年4月ごろまでの受注残を確保している。シャーパーの稼働率も徐々に上昇しているが、小ロット、多品種、短納期に苦しめられ、稼働と生産量が比例しない。今後メーカー値上げ分の転嫁と加工賃の是正が重点課題。

【東海】地元ファブ(HおよびMグレード)の受注量は、6～8月に比べると増加傾向にある。シャーパーもフル稼働の企業が増えている。先行きの引合いも堅調が見込まれ、高操業を維持できそうである。需要増と材料高を背景に、鉄骨受注単価が底上げされているが、半年前に見積りした物件や継続案件もあり、採算的に厳しい状況が続いている。切板単価も

徐々に切り上がっているが、母材の値上げをカバーできていない。適正加工賃の確保が喫緊の課題である。

建産機関連も、復興需要や消費税引き上げ前の駆け込み需要等を背景に総じて好調を維持している。シャー各社は、材料の品薄状態や母材価格転嫁の問題を抱えているが、仕事量としては全体的に増加基調をたどっている。

【大阪】足元の需要は建築土木のスポット物件が増え、引き合いも多い。

新規ロールの入荷遅れ、原板納期の長期化、在庫の歯抜けなどが重なり、材料不足への懸念が強まっている。

橋梁の入札は順調に実施され、年間発注量は前年比5万トンの増の28万トンレベルで推移している。ただし、受注するファブに偏りが見られ、専門ファブは低調に推移している。

鉄骨は、地元の大型案件は少ないが、中小物件及び首都圏・名古屋地区の建築案件が出ており、ファブの仕事量は、半年～1年先まで埋まっている。建産機は堅調に推移。

【九州】夏場ごろから動き出した建築案件は、ピークを迎えており、各ファブともかなりの仕事量を抱え、来年夏場ころまでの受注残を確保している。今後ファブの供給能力が問題となる。建材系シャーの稼働はほぼフル操業で、来年上期まで高稼働が続く見込み。

建機は、排ガス規制の駆け込み等により生産が増加したが、下期は苦戦が予想される。造船は、投機的発注も含む需要が回復し、2015年度一杯まで船台期間を延ばしている。

次に、需要動向を概観すると、

(1) 建設機械は、内需の急激な回復を主因に、10月の出荷金額はトータルで3か月連続で前年水準を上回って推移している。機種別にみると、①主力の油圧ショベルは、国内向けが排ガス規制・消費税導入前の駆け込みと復興需要の本格化等を背景に、大幅増(前年比+55%)を示し、堅調に推移している。②建設用クレーンも、増税前の駆け込みや公共工事の増加期待、中古機械価格の上昇、円高修正による輸出増等により、好調を継続している。③ダンプ・トレーラーは、10トクラスのダンプは、各メーカーともフル操業が続き、受注残も大量に抱えているため、生産計画を上方修正している。重機積載用トレーラーも絶好調で、これからも暫く続きそうである。

重電関係は、火力発電関連が内外需ともに堅調に推移し、インド向けの火力発電、サウジ向け変圧器等の案件が足元の加工に結びついている。

鉱山機械は、昨年夏場以降、1年以上の生産調整にもかかわらず依然底入れが確認できず先が見えない状況が続いている。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、25年度入札量は、25万トン程度が見込まれ、昨年度(23万トン)規模を上回る見通しである。現時点での全国橋梁落札量は、168千トンと順調に推移しているが、本年度上期の切板加工量は、前年同期を若干上回るレベル

にとどまっている。落札量は、年度末に向けて増加すると見込まれ、ファブの山積みも、今後高くなるとみられる。シャー加工量もようやく足踏み状態を脱し、4Q以降の回復が期待される。

一方、建築鉄骨は、各地とも小型案件（病院、物流倉庫、店舗等）の鉄骨需要は旺盛で、Hグレード以下の中小ファブ稼働の繁忙が続いている。（形鋼やコラムの伸びが大きく、切板加工にはあまり繋がらない。）

一方、北海道・首都圏・名古屋地区をはじめとする大型再開発案件の着工が本格化し、関係ファブの山積み、加工量ともに徐々にピークを迎えつつある。ファブ各社とも12月以降フル操業体制に入り、その先1～2年は高操業を維持する見込みである。

シャー加工量も4Q以降フル生産規模まで増加すると予想される。

(3) 一般店売り分野については、主要分野である中小建築案件のほか、建産機分野等からの受注も出始めている。ようやく長期低迷を脱し、6～7月頃から徐々に売り上げ、加工量とも増加している。各地区とも小ロット・短納期の商いが中心で、依然採算面の改善には至っていないが、今後、多分野からの引合い増や操業度の向上等が期待できる状況になっている。

次に、母材供給面については、国内のメーカー・ロールは、輸出量の安定確保に加え、造船、建築土木、建機向けを中心とする内需増により、一段とタイトな度合いを増しているようである。また、ミル各社は、内外需の増勢が続く中、相次ぐ設備の炉修やシフトダウンを計画していると伝えられる。

こうした状況下、各ミルは、年初より店売り向けを皮切りに、厚板価格の段階的値上げを発表している。今後とも、紐付き価格の進捗を含め、メーカーの価格対策から目が離せない状況にある。

シャー業界としては、母材値上げ分のユーザー転嫁を最優先課題に位置付け、目下それに取り組んでいる最中である。しかし転嫁に苦慮している状況が続いており、浸透するまでにはかなりの時間を要しそうである。

価格転嫁の実現に向け、厚板需給の安定と、メーカーの販価是正スタンスの堅持が不可欠であり、引き続き母材メーカーサイドの強力なサポートを切にお願いしたい。

なお、シャー業界が抱える直近の課題は、以下の通りである。

- ① 適正加工賃の確保
- ② 母材価格引き上げに伴う価格転嫁問題
- ③ 建設分野を中心とする需給ギャップ問題(ファブの能力不足、等)
- ④ 与信管理、雇用対策(雇用助成金の申請、セーフティネット保証制度申請等)
- ⑤ コンプライアンス対応(品質証明ガイドラインの普及促進、独禁法遵守、輸送条件問題、等)
- ⑥ 製造業の国内空洞化
- ⑦ 電力料金等コストアップ問題

3. 足元の主要需要部門の動き

(1) 橋梁・建築鉄骨の動向

【全体】

足元の建材分野の活動は、鉄骨分野を中心に徐々に回復しており、シャー加工量も増加基調にある。しかしながら、橋梁向けの絶対値レベルは未だ低位にあり、鉄骨向けも切板明細遅れや能力不足による加工遅れあることから、本格回復には至っていない。

今後の橋梁・鉄骨分野のファブ稼働は、橋梁ファブの加工量の拡大や大型再開発案件の本格着工を背景に、鉄骨ファブがフル生産の時期を迎え、年末以降、高位の状態が継続する見通し。

また、年度末に向けては、土木プロジェクト(セグメント)もスタートする見通し。

シャー稼働も主力分野の活動増加を受け、12月以降はフル生産化する見通し。但し、以前に比べると小単重化が進展しており、納期対応に苦慮するケースもありうる。

【橋梁】

現時点での全国橋梁落札量(H25FY)は、168千トと順調に推移しているが、昨年同様に関東地区以外の橋梁ファブが上位を占めている状況であり、上期までのシャー加工量は、前年度を若干上回る程度で推移。

今後の橋梁ファブの山積みは、年末に向けて高くなる見込みであり、年度末に向けて落札量も増加予定である。

シャー加工量も、年度末までの山積みが確定している状況ではないが、年末以降、高水準で推移する見通し。

【鉄骨】

首都圏の大型再開発案件の着工が本格化され、Sグレードファブの加工量は、徐々にピークに向う状況にある。

但し、ファブからの切板明細発注の遅れ(GCとの間での図面承認遅れ等が要因)やファブ能力不足による加工遅れ等があることから、シャー加工量は増加基調にあるが、各社にバラつきあり。

今後のSファブは、若干の月差はあるが、ほぼ12月以降フル生産となり、その後1～2年は高位の操業レベルを維持する見込み。しかしながら、大型案件の着工レベルは、ファブ製作能力を上回る(*)状況になっていることから、工事遅れの懸念あり。

(*一部ファブでは、外注化を検討したが、Hグレードファブの山積みが高く、断念。)

シャー加工量も、年内にはファブのフル生産規模まで増加する予定であり、当面高位の加工レベルで推移する見込み。

(2) 建産機・重電・金属工作機械の動向

【全体】

前回報告時(9月)は、回復気配の始動が感じられる程度であったが、足元の受注動向から判断すると、極端な不振が続く鉱山機械を除き、回復基調が鮮明になってきたと言える。

しかしながら、これらの受注増は、消費税増税・排ガス規制前の需要の先食いとなる可能性が高く、その反動減が懸念されることや、海外生産シフトの動きが止まっているわけではないだけに、先行きには不安要素も多いことも事実である。

【建設機械】

内需の急激な回復と共に輸出も増加し、10月の工業会統計では3カ月連続で前年比プラス(21%)となった。建設機械全体の回復が本格化してきたようである。

・油圧ショベル

排ガス規制・消費税増税前の駆け込み需要や復興・土木・建築需要が本格的に動き出したことから、国内向けは前年比+55%と堅調に推移している。関係シャーの年度内の加工量も高水準を維持できる見込みである。

・ミニショベル

住宅需要の増加による影響から国内向けが堅調であり(+4%)、輸出も北米向けを中心に大きく伸びており(+32%)、暫くはこのレベルが続きそうである。

・建設用クレーン

ラフテッククレーンは、内外需共に好調さを持続している。国内向けは増税前の駆け込み、中古機械価格の上昇、公共事業を始めとする建設工事の増加期待等から、また輸出は円高修正の影響もあり好調。足元の生産はリーマン前の水準を大きく上回っており、当面この基調に変化はないとみられる。

クレーンは、長期低迷後、夏前頃から急激に回復しており足元の生産は1～6月の実績からみるとおよそ+30%のレベルとなっている。輸出の回復と同時に国内公共事業や建築案件を考慮すると、需要は底堅いものと期待できる。

・ホイールローダ

復興需要と季節要因からくる雪寒車向けが大増産。この機種においてはフル操業状態が年内続く。

【鉱山機械】

燃料炭の価格下落の影響から、機械販売が昨年夏場から急減。一年以上の生産調整にも拘らず、まだ底入れは確認できず先行きも見えない状況である。

大型機械だけに関係シャーの加工重量及び付加価値減の影響は甚大で悩ましい。

【重電】

以前からの引き合い案件であった、インド/火力発電、サウジ/変圧器等の案件が足元の加工に結びついている。他にもタービンのケーシング受注が大幅に増えていることから、年明けまではまずまずの稼働が維持できそうである。また先行きも変圧器の受注が見込まれることや、現在加工中の継続案件の引き合いもあり、これらに期待したいものである。

昇降機のエレベータ向けの加工量は、ほぼ昨年並みを確保しているようである。現在建設中のビルや、25年以上経過した物件の更新需要が今後も見込まれることを考慮すると、来年度以降は確実に受注が増加すると思われる。

【板金・鍛圧機械】

10月受注は「国内の設備投資環境が良くなっており、海外も欧米に動きが出てきた」（工業会）ことから前年比で37%増の結果となった。関係シャーの足元の加工量は、前回報告時からみると20%程度増加しており、操業度は回復模様。

・板金系

10月受注は+43%の増加。レーザ・パンチング・プレスブレーキのいずれも大幅に受注を増やしている。先行きも需要家の見通しは強気であり、不透明な点はあるものの当面堅調に推移する見込み。

・プレス系

10月の受注実績は超大型以外小型から大型まですべて受注増となっていることから、43%増と好調。切板加工量は足元もまずまずのレベルで横ばいとなっており、需要家の受注回復基調の流れから推測するとこの状態は続きそうである。

【フォークリフト】

リーマン前のピーク時からみると7割弱の生産であるが、排ガス規制前の駆込み需要から、10トン以上の大型フォークが大幅に受注増となっている。大型の増産だけに切断加工重量としては増えているとみられる。

【ダンプ・トレーラー】

10トクラスのダンプは各メーカーともフル操業が続き、さらに受注残も大量に抱えているため生産計画も上方修正されている。足元は排ガス規制前の駆込みと、これからも続くと予想される被災地向けの需要等から長期に亘り堅調さを持続できる見込みとなっている。

また重機積載用トレーラーも絶好調で、この部門における加工量も暫く確保できそう。

【産機 店売り】

長期の低迷から脱出し、漸く受注状況に好ましい変化が見られるようになった。本格的回復までには至っていないものの、売上・加工重量とも増加している企業が徐々に多くなっており、景気回復ムードやオリンピック招致決定等で先行きに期待できそうである。

素材価格改定幅の需要家への転嫁はまだ難航しているが、素材供給のタイト感もあり適正レベルへの早期是正を待ちたいものである。

【参考】 成品切板の最終用途比率（平成25年3月出荷分。厚板シャー工組調べ）

・建築用：	34%	(34%)
・土木用（橋梁、鉄塔等）：	13%	(14%)
・建産機用：	32%	(30%)
・輸送機用（船舶、自動車）：	9%	(8%)
・重電用：	2%	(2%)
・その他（鉄道車両、容器、二次製品）	10%	(12%)

（注）カッコ内の数字は、23年3月時点の最終用途比率。

全国厚板シェアリング工業組合

シャープ業の厚中板在庫推移

(H25. 12. 13)

組合員の厚中板在庫推移(155社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項目	24/12末	25/3末	6月末	9月末	12月末	26/3末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	338	325	347	357	350	345
前期比/量	▲10	▲13	22	10	▲7	▲5
在庫率	222.2	202.8	202.4	196.5	194.4	191.7

【コメント】

- 在庫量は、昨年6月末の343千トンをボトムに、建産機需要の急激な落ち込みにより、7月末以降増加を辿った。このため8月以降仕入れ調整局面が続き、この結果、今年3月末(325千トン)までは概ね減少傾向で推移した。その後は、34~35万トン台で一進一退が続いている。
- 一方、在庫率は(※適正在庫率は150%~200%以下)、昨年8月から今年6月まで一貫して、200%を超えて推移した。特に12月~1月末は出荷の大幅な落ち込みにより、220~230%まで急上昇した。その後は低下傾向を辿り、7月末は191.8%と、約1年ぶりに200%を下回り、足元の在庫率はほぼ適正レベルで推移している。
- 今後、シャープ各社が必要に見合った慎重な仕入れ姿勢を堅持すれば、在庫数量は、12月末350千トン、3月末345千トン程度まで減少するとみられる。
- また在庫率は、仮に月間出荷量が18万トン前後で推移すると想定した場合(4~10月の月平均は175千トン)、12月末は194%、3月末は192%程度まで低下すると推定される。
- 今後とも建設および建産機関連を中心に本格的な需要拡大が見込まれることから、切板需要の大幅な増加が期待される。こうした中、シャープ各社は、足元の需給動向には充分留意しながら、適正な仕入れ及び在庫管理に関しては引続き細心の注意が求められる。

以上